

河伯令嬢

泉鏡花作

――心中見た見た、並木の下で

しかも皓齒と前髪で――

――

北國金澤は、元祿に北枝、牧童などがあつて、俳諧に縁が浅くない。――つい近頃覽たのが、文政三年の春。……春とは云つても、あのあ

たりは冬籠ふゆこもりの雪ゆきの中で、可心かしん　ー　と云いふ俳人はいじんが
手てづくろひに古屏風ふるびやうぶの張替はりかへをしやうとして　ー
（北枝編ほくしへん　ー　卯辰集うたつしふ）　ー　が、屏風びやうぶの下した
張ばりに残のこつて居あたのを發見はつけんして、．．．．．およ
そ百歳もくとせの古いにしへををなつかしむまゝに、と序じよして、丁てい
寧ねいに書かきとつた寫本しやほんがある。

卯辰うたつは、いまも山やまよりの町まちの名なで、北枝ほくしが住すんで
居あた處ところらしい。
可心かしんの寫本しやほんによると、奥おくの細道ほそみちに、そんな記事きじは
見みえないが、

翁おきなにぞ蚊帳かやつり草さうを習ならひける　　北枝

野田山のだやまのふもとを翁おきなにもなひて、と前まへがきした
のみが見みえる。北方ほくはうの逸士いつしは、芭蕉ばせをを案内あんないして、其その
金澤かなざはの郊外かうくわいを歩ある行あるいたのである。又また．．．．．

丸岡まるをかにて翁おきなにはかれ侍はべりし時扇ときあふぎに書かいて給たまはる。

もの書かいて扇子あふぎへぎ分わくる別哉わかれかな　　芭蕉

本人が「給はる」と其の集に記したのだから間違
ひはあるまい。奥の細道では、

もの書て扇子引さくなごり哉

である。引裂くなどと云ふ景氣は旅費の懐 都合
もあり、元來、翁の本領ではないらしい・・・
それから、

石山の石より白し秋の霜 芭蕉

那谷寺に於ける此の句が、

石山の石より白し秋の風

となつて居る。而して、同じ那谷に同行した山中
温泉の少年衆之助、新に弟子に成つて、桃妖と稱し
たのに封しての吟らしい。

湯のわかれ今宵は肌の寒からむ 芭蕉

おなじく桃妖たうえうに與あたへたものである。芭蕉ざいさん
性的せいに少すこし怪あやしい。……

山中やまなかや菊きくは手折たをらじ湯ゆの匂におひ

此この句くは、芭蕉ばせをがしたゝめたのを見みた、と北枝ほくしが
記しるして居あるから、

山中やまなかや菊きくは手折たをらぬ湯ゆの匂におひ

世よに知しられたのは、後のちに推敲すめかうていせい訂正ていせいしたものであら
う、或あるひは猿蓑ざるみのを編あむ頃ころか。

其その猿蓑ざるみのに、

凧たこきれて白嶺しらねヶ嶽たけを行方ゆくへかな
桃妖たうえう

温泉おんせんの美少年びせうねんの句くは ー ー 北枝ほくしの集しふだと、

糸切いとぎれて凧たこは白嶺しらねを行方ゆくへかな

に成つて居る。そのいづれか是なるを知らない。
が、白山を白嶺と云ふ……白嶺ヶ嶽と云は
ないのは事實である。

これは、唯、その地方に、由來、俳諧の道にたづ
さはつたものの少くない事を言ひたいのに過ぎな
い。……處が、思ひがけず、前記の可心が、
此編に顔を出す事になつた。

私は――小山夏吉さん。（以下、「さん」
を失禮する。俳人ではない。人となりは後に言はう
と思ふ。）と炬燵に一酌して相對した。

「――昨年、能登の外浦を、奥へ入らうと歩
行きました時、まだほんの入口ですが、羽咋郡の大
笹の宿で、――可心と云ふ金澤の俳人の
（能登路の記）と云ふのを偶然讀みました。

寢床の枕頭、袋棚にあつたのです。色紙短冊な
どもあるから些と見るやうに、と宿の亭主が云つた
ものですから――」

小山夏吉が話したのである。

「宿へ着いたのは、まだ日のたかい中だったのです。下座敷の十畳、次に六畳の離れづくりで、広い縁は、滑るくらゐ拭込んでありました。庭前には、枝ぶりのいゝ、大な松の樹が一本、で、些とも、も欲しさうに拵へた處がありません。飛々に石を置いた向うは、四ツ目に組んだ竹垣で、垣に青薄が生添つて、葉の間から蠶豆の花が客を珍しさうに覗く。．．．．．づつと一面の耕地水田で、その遠くにも、近くにも、取りまはした山々の末かけて、海と思ふあたりまで、一づゝ蛙が鳴きますばかり、時々此の二階から吹くやうに、峰をおろす風が、庭前の松の梢に、颯と鳴つて渡るのです。」

「．．．．．今でも覚えて居ますが、日の暮にも夜分にも、殆ど人聲が聞こえません。足音一つ響かないくらゐ、それは静なものでした。それで、此が温泉宿．．．．．いや鑛泉宿です。一時世の中がラジウムばかりだった頃、憑ものがしたやうに賑つたのださうですが、汽車に遠い山入りの邊鄙で、特に

和倉の有名ながある國です。近ごろでは、まあ精々、
在方の人たちの遊び場所、然も田植時にかゝつて、
がらんとして居ると聞いて、却つて望む處と、故と
外濱の海づたひから、二里ばかりも山へ入込んで泊
つたのです。別に目立つた景色もありません、一筋
道の里で、川が、米町川が、村の中を、すぐ宿の前
を流れますが、谿河ながら玉を切るの、水晶を刻む
のと、黒い石、青い巖を削り添へて形容するやうな
流ではありません。長さ五間ばかり、恚う透すと、
渡る裏へ橋げたまで草の生亂れた土橋から、宿の玄
關へ立つたのでしたつけ。ー (さあ、何う
ぞ。) が、小手さきの早業で、例のスリツパを、
一寸突直すんぢやない、うちの女房が、襷をはづし
ながら、土間にある下駄を穿いて、此方へー
と前庭を一まはり、地境に茱萸の樹の赤くぼつ／＼
色づいた下を。それでも小砂利を敷いた壺の廣い中
に、縞笹がきれいらしく、すい／＼と藺が伸びて、
其の眞青な蔭に、晝見る螢の朱の映るのは紅羅の花
の蕾です。母屋續きの濡縁に添つて、小さな杜若の
咲いた姿が、白く光る雲の下に、明く、しつとりと
露を切る。・・・木戸の釘は錆びついて、抜

くと、蝶番が、がったり外れる。一つ撓直して、扉を開けるのですから、出會がしらに、水鶏でもお辭儀をしさうな、此の奥庭に、松風で。．．．．．です。ですから、私は嬉しく成つて、何處を見物しないで、翌日も一日、ゆつくり逗留の事と思つたのです。

それに、とに角、大笹鑛泉と看板を上げたゞけに、湯は透通ります。西の縁つたひに、竹に石燈籠をあしらつた、本屋の土藏の裏を、づつと段を下りて行くのですが、人懐い可愛い雀が、ばら／＼飛んだり踊つたり、横に人の顔を見たり、其の影が、湯の中まで、竹の葉と一所に映るのでした。

――夜、寢床に入りますまで、二階屋の上下、客は私一人、あまり閑静過ぎて寝られませんか、枕頭へ手を伸ばして．．．．．亭主の云つた、袋戸棚を。で、嚙ぞ埃だらうと思ふのが、きちんとして居る。上包して一束、色紙、短冊。．．．．．俳句、歌よりも、一體、何と言ひますか、冠づけ、沓づけ、狂歌のやうなのが、多い、その中に――

(能登路の記) ―― があつたのです。大分古び

がついてゐた。假綴かりとぢの表紙へうしを開あけると、題だいに並ならいベ
て、（大笹村おほざさむら、川裳明神かはすそみやうじん 縁起えんぎ。）としてあり
ます。

川裳明神かはすそみやうじん・・・・・

わたしはハツと思おもひました。」

二

「――川裳明神かはすそみやうじん 縁起えんぎ。

――此この紀行きこう中ちゆうでは、人ひとが呼よんで、御坊ごぼう々々ノノと
言いひますし、可心かしんは坊ぼうさんかと、讀よみながら思おもひま
したいが、然さうではないい。いかにも、氣きがつくと其その
頃ころの俳諧はいかいの修しゆ行ぎやう者じゃは、年とし紀きにかゝはらず頭あたまを丸まるめ

て居たのです。――道理こそ、可心が、大木の松の幽寂に二本、すつくり立つた處で、岐路の左右に迷つて、人少な一軒屋で、孫を抱いた六十餘の婆さんに途を聞くと、いきなり奥へ入つて、一錢もつて出た……（いやとよ、老女）と、最明寺で書いて居ますが、報謝に預るのではない、たゞ路を聞くのだ、と云ふと、魂消た氣の毒な顔をして、くどくど詫をいひながら、其のまゝ、跣足で、雨の中を、びた／＼、二町ばかりも道案内をしてくれた。此の老女の志、（現世に利益、未來に冥福あれ、）と手にした數珠を揉んで、別れて歸る其の後影を拜んだと云ふ……宗匠と、行脚の坊さんと、容子がそつくりだつた事も分りますし、跣足で路しるべをしたおくRuby婆さんの志、其の後姿も、尊いほどに思はれます。――折からのざんざ降で、一人旅の山道に、雨宿りをする蔭もない……絡ふうちも、袖を絞つたと云ふのですが。――これは、可心法師が、未森の古戰場――今濱から、所口（七尾）を目的に、高畑をさして行く途中です。

何でも其の頃は、芭蕉の流れを汲むものが、奥の細道を辿るのは、エルサレムの宮殿、近代の學者たちの洋行で、奥州めぐりを済まさない、一人前の宗匠とは言はれない。加賀近國では、よし、それまでになくても、内外能登の浦づたひをしないと、幅が利かなかつたらしいのです。

今からだと夢のやうです。

はじめ、河北瀉を渡つて　　可心は、あの湖を舟で渡つた。　　高松で一夜宿、國境になりますな。それから末松の方へ、能登浦、第一歩の草鞋を踏むと、すぐ其の濱に、北海へ灌ぐ川尻が三筋あつて、渡船がない。橋は素よりで、土地のものは瀬に馴れて、勘で渉るから埒が明く。勿論、深くはない、が底に夥多しく藻が茂つて、これに足を掬まれて時々旅人が溺れるので。　　可心は馬を雇つて、びく／＼もので涉つたが、其の第三の川は、最も海に近いだけに、ゆるい流も、押し寄せる荒海の波と相争つて、煽られ、揉まるゝ水草は、忽ち、馬腹に怪しき雲の湧くありさま。幾萬條ともなき、青い炎、黒い蛇が、舊曆五月、白い日の、川波に倒

に映つて、鞍も人も吞まうとする。笠被た馬士が轡頭を緊乎と取つて（やあ、黒よ、観音様念じるだ。確りよ。）と云ふのを聞いて、雲を漕ぐ櫂かと危む竹杖を宙に取つて、眞俯伏に成つて、思はずお題目をとなへたと書いて居ます。

旅行は、どうして、樂なものではなかつたのです。可心にとつて、能登路の此の第一歩の危懼さが、………。實は讖をなす事になるんです。

と言つて、小山夏吉は一息した。

「やがて道端の茶店へ休むと——薄曇りの雲を浴びて背戸の映山紅が眞紅だつた。つい一句を認めて、もの優しい茶屋の女房に差出すと、澁茶を飲んで飲んで居る馬士が、俺がにも是非一枚で、………其の短冊を矢鱈に幾度も頂いた。

（をかし。）と云つて、宗匠一寸得意ですよ。——道中が些と前後しました。——可心法師は、それから徒歩で、二本松で雨に悩み、途に迷ひ、情あるお婆さんに導かれて後、とぼ／＼と高畑

まで辿り着く。其の夜、旅のお侍と俳談をする處
があります。翌日は快晴。しかし昨日、道に迷った
難儀に懲りて、宿から、すぐ馬を雇つて出ると、曳
出した時は、五十四五の親仁が手綱を取つて、十二
三の小僧が鞍傍について居た。寂しい道だし、一人
でも連は難有いと喜んだのに、宿はづれの並木へ掛
ると、奴が綱に代つて、親仁は脚煙管で、うしろ手
を組んで、てくりノゝと澄まして歸る。……
前後に人脚はまるでなし。……（これ、兄
や、こなた馬は曳けるかの、大丈夫ぢやらうかの。
私は初旅ぢや。その上馬に乗るも今度がはじめてぢ
や。それにの、耳はよう聞えずの。……頼
んだぞ。）いかにも心細さうです。讀んで居て段々
分りましたが、筆談でないと通じないほどでもない
が、餘程耳が疎いらしい。……或はそんな
事で、世捨人同様に、——俳諧はそのせめても
の心遣りだつたのかも知れませんが、勿論、獨身らし
いのです。寸人豆馬と言ひますが、豆ほどの小僧と、
馬に木茸の坊さん一人。此が秋の暮だと、一里塚で
消え了ひます、五月の陽炎を乗つて行きます。

お婆さんが道祖神の化身なら、此の子供には、
ながら童子の憑移つたやうに、路も馬も涉取り、正
午頃には早く所口へ着きました。可心は穴水の大庄
屋、林水とか云ふ俳友を便つて行くので。・・・
・・こゝから七里、海上の渡ださうです。

こゝの茶店の女房も、（ものやさしく取りはや
して）　　ー　此のやさしくを女扁に、花、椀。

ー　と云ふ字があてである。・・・一寸
今昔の感がありませう。　　ー　（女ばかりか草さ
へ菜さへ能登は優や土までも　　ー　俗謡の趣　　は
これなんめり。）　と調子が乗つて、はやり唄まで
記した處は、御坊、ここで一杯きこしめしたかも知
れない。・・・

亭主が、これも、まめ／＼しく、方々聞合はせて
くれたのだけれども、生憎便船がなく、別仕立の渡
船で、御坊一人十匆ならばと云ふ、其の時の相場に、
辟易して、一晚泊る事にきめると、居心のいゝ大き
な旅籠を世話しました。（私の大笹の宿と云ふ形
があります。）　其の宿に、一人、越中の氷見の若

い男の、商用で逗留中、茶の湯の稽古をして居るのに、茶をもてなされたと記してあります。商用で逗留中、若い男が茶の湯の稽古。ー その頃の人気が思はれます。しかし、何だかうら寂しい。

翌日は、巳の時ばかりに、乗合六人、石動山のお札くばりの山伏が交つて、二人船頭で、帆を立てました。石崎、和倉、奥の原、舟尾、田鶴濱、白濱を左に、能登島を正面に、此のあたりの佳景いはむ方なし。で、海上 左右十町には足りまいと思ふ、大蛇と稱へる處を過ぎると、今度は可恐しく広い海。．．．能登島の鼻と、長浦の間、今の三ヶ口の瀬戸でせう。其の大海へ出る頃から、（波やゝ高く、風加はり、忽ち霧しぶき立つと見れば、船頭たち、驚破白山より下すとて、巻落す帆の、靴む音骨を裂く。唯一人おはしたる、いづくの里の女性やらむ、髪高等に結ひなして、姿も、いうにやさしきが、いと様子あしく打悩み、白芥子の一重の散らむず風情。．．．

むかし義經卿をはじめ、十三人の山伏の、鰐の口

の安宅をのがれ、俱利伽羅の龍の背を越えて、四十
八瀬に日を數へつゝ、直江の津のぬしなき舟、朝の
嵐に漾つて、佐渡の島にも留まらず、白山の嶽の風
の激しさに、能登國珠洲ヶ岬へ吹はなされたまひし
時、いま一度陸につけて、ともかくもなさせ給へと
て、北の方、紅の袴に、唐のかゞみを取添へて、
八大龍王に參らせらると、つたへ聞く、その面影も
目のあたり。．．．と此の趣が書いてあ
ります。

―― 佐渡にも留めず、吹放つた、それは外海。

此の紀事の七尾灣も一手の風に三を飛ばす、靈山の
威を思ふとともに、いまも吹きしむ思がして、――
大笹の夜の宿に、ゾツと寒く成りました。それだ
のに搔卷を刎ねて、寫本を持つたなり、起直つたん
です、私は．．．．．

小山夏吉の眉に、陰が翳した。

「．．．．．紀行に、前申した、川裳明神 縁
起とあるのでせう。可心の無事は固よりですが、こゝ
で此の船に別條が起つて、白の花が散るのではない

か。そのいなる姿を、明神に祭つたのではないだ
らうか、とはつとしました。私の聞き知つた、川裳
明神は女神ですから。．．．．．處で（船中に
は、一人坊主を忌むとて、出家一人のみ立交る時は、
海神の祟ありと聞けば、彼の美女の心、いかばかり
か、尚ほその上に傷みなむ。坊主には候はず、出家
には侍らじ。と、波風のまぎれに聲高に申しし
が、．．．．．船助かりし後にては、婦人の妍き
につけ、あだ心ありて言ひけむやうに、色めかしく
も聞えてあたり恥し。）と云ふので、木の葉とは
かり浮き沈む中で、聾 同然の可心が、何慰めの言
も聞き得ないで、却つて人の氣を安めようと、一人、
魚のやうに口を開けて、張つて（坊主でない、坊
主でない。）と喚いた様子が可哀に見えます。

穴水の俳友の住居は、千石の邸の構で、大分懇に
もてなされた。かこひ網の見物に（われは坊主頭
に顛巻して）と、大に氣競ふ處もあつて――
（鰯、鯖、鯡などの幾千ともなく水底を網に翻るあ
りさま、夕陽に紫の波を翻 して、銀の大坩爐に
溶くるに異ならず。）―― 人氣がよくて魚も澤

山だつたんでせう。磯端で、日くれ方、一寸釣をす
ると、はちめ（甘鯛の子）、阿羅魚、鰈が見る見
るうちに、．．．．などは羨しい。
七日ばかり居たのです。

これまでは、内浦で、それから半島の真中を間
道越に横切つて、——輪島街道。あの外浦を加
賀へ歸らうと云ふ段取に成ると、路が嶮くつて馬が
立たない。駕籠は．．．．四本竹に板を渡した
ほどののがあるにはある、けれども、田植時で昇き
手がない。．．．．大庄屋の家の屈強な若いも
のが、荷物と案内を兼ねて、其處でをかしいのは、
（遣りきれなく成つたら負さりたまへ。）と云
ふ 伴友の深切です。出發の朝、空模様が悪いのを
見て、雨が降つたら途中から必ず引返せ、と心づけ
て居ます。道は餘程難儀らしい．．．．

小山夏吉は、炬燵蒲團を指で辿りつゝ言つた。

讀者よ、小山夏吉は續けて言ふ。

「何、私の大笹どまりの旅行なぞ、七尾行の汽車で、羽咋で下りて、一の宮の氣多神社に參詣を濟ませましてから、外浦へ出たまでの事ですが、それだつて、線路を半道離れますと、車も、馬も、もう思ふやうには行きません。あれを、柴垣、二狹谷、大島、と傳つて、高濱で泊るつもりの處を、鑛泉があると聞いて、大笹へ入つたので。はじめから歩行つつもりではありましたが、景色のいゝ處ほど、道は難澁です。

次手に・・・其の高濱から海岸を安部屋へ行く間に、川があります。海へ灌ぐ川尻の處は、私はまだ通らなかつたうちですが、大笹の宿の前を流れる一米町RTよねまち》川の末に成ります。現に寢床へさら／＼と音がします。――其の川尻を渡つて、安部屋から、百浦、志加浦、赤住・・・此の赤住を・・・可心の紀行には赤垣と誤つて居ます。――福浦、生神、七海。それか

ら富來、増穂、劍地、藤濱、黒島　――　外濱を段々、
奥へ、次第に、巖は荒く、波はおどろに成つて、平
は奇に、奇は峭くなるのださうで。．．．．．可
心は此の黒島へ出たのです、穴水から。間に梨の木
坂の絶所を越えて門前村、總持寺（現今、別院）
を通つて黒島へ、　――　其から今言ひました外濱
を逆に辿つて、　――　一の宮へ詣つて、もとの河
北瀧を金澤へ歸らうとしたのです。黒島へ一晚、富
來へ Ruby > 二晩、大笹に近い、高濱へ　――
晩。．．．．．唯、その朝の暴風雨と、米町川の
流の末が、可心のために、　――　女神の縁起に成
りました。

まだ、途中の、梨の木坂を越えるあたりから降
したらしいのですが、さすが引返すでもなかつた。
家数四五軒、侘しい山間の村で、辨當を使つた時、
雨を凌いで、簀の子の縁に立掛けた板戸に、（此
の家の裏で鳴いたり時鳥。．．．．．）と旅人
の樂書があるのを見て、つい矢立を取つて、（此
のあたり四方八方時鳥、可心。）鳴いて居るら
しく思はれます。やがて、總持寺に參詣して、

(高塔の上やひと聲時鳥、可心。) これは一寸
おまけらしい。雨の中に、門前の茶店へ休んで、土
地の酒造の豪家に伴友があるのを訪ねようと、様子
を聞けば大病だと云ふ。式臺まで見舞ふのも却つて
人騒せ、主人に取次もしやうなら、遠來の客、唯一
泊だけでもと氣あつかひをされようと、遠慮して、道
案内を返し、一人、しよぼ／＼、濡れて出て、黒島
道へかゝらうとする、横筋の小川の畝をつたつて來
て、横さまに出會した男がある。……大く、
酒、とかいた番傘をさして居ると、紀行の中にある
のです。――

一杯、頂きませう。

最上一杯。……最上一杯。

息つきを、と云ふはどの、私の話振ではありませ
んけれど、私に取つて、これからは少々勢をかり
ませんと、でないとお話しにくい事がありますか
ら。……

四

「羽織は着たが、大番傘の其の男、足駄穿の尻端折で、出會頭に、これはと、頬被を取つた顔を見ると、したり、可心が金澤で見知越の、いま尋ねようとして、見合はせた酒造家の、此は兄ごで、見舞に行つた歸途だと言ふのです。此の男の住居が黒島で、其處へ其の晩泊りますが、心あての佻友は大病、思ひがけない其の兄の内へともなはれる．．．．．何となく人間の離合集散に、不思議な隠約があるやうに思はれて。――私は宿で、床の上で、しばらく俯向いて、庭の松風を聞いて居ました。――

可恐しい荒海らしい、削立つた巖が、轟々見えて、沖は白波の唯打累る、日本海は暗いやうです。黒島を立つて、劍地、増穂。――富來の、此も佻友の家に着いた。むかし、渤海の船が息をついた港だ、と言ひます。また格別の景色で．．．．．近い處に増穂のあるのは、貝の名から出たのださうで、濱の渚は美しい。．．．．．

金石の濱では見られません。櫻貝、阿古屋貝、撫子貝、貝寄の風が桃の花片とともに吹くなどと云ふ事は、龍宮を疑はないものにも、私ども夢のやうに思はれたもので。

可心も讚嘆して居ます。半日拾ひくらした。これが重荷に成つた。――故郷へ土産に、と書いて居ます。

此のあたりに、荒城の狭屋と構へて、底の知れない断崖の巖穴があると云つて、義經の事が又出ました。

免れられない……因縁です。――
小山夏吉は、半ば獨言いて嘆息して、苦さうに猪口を乾した手がふるへた。

小山夏吉は寂く微笑んだ。

「はゝは、泣くより笑で。……富來に、

判官どのが詠じたと言傳へて、（義經が身のさび
刀とぎに来て荒城のさやに入るぞをかしき。）北

の方が、龍王の供料にと、紅の袴を沈めた、白山がだけの風に、すゞの岬へ漂つた時、狭屋へ籠つての歌だ、と言ふのです。悪い洒落です。それに、辨慶に鮑を取らせたから、鮑は富來の名物だ、と言ひます。多分七つ道具から思ひついたものだらう、と可心も此には弱つて居る。．．．．．

富來を立つ時、荷かつぎを雇ふと、すた／＼、せか／＼、女の癖に、途方もなく足か早い。おくれまいとすると、驅出すばかりで。濱には、榮螺を起す男も見え、鰯を拾ふ童も居る。．．．．．汐の松の枝ぶり一つにも杖を留めようとする風流人には、此奴あてつけに意地の悪いほど、とつ／＼と行く。然うでせう、駄賃を稼ぐための職業 婦人が聾の坊さんの杖つきの字に附合つて居られる筈はない。喘ぎ／＼、遣切れなくなつて、二里ばかりで、荷かつぎを断りました。御坊が自分で、荷を背負つて、これから注文通り景色を賞め／＼歩行き出したは可いが、荷が重い。．．．．．弱つた、弱つた、と又弱つて居る。．．．．．

福浦のあたりは、濱ひろがり、石山の下を綺麗な水が流れて、女まじりに里人が能登縮をさらして居て、其の間々の竈からは、鹽を焼く煙が靡く。小松原には、晝顔の花が一面に咲いて、渚の浪の千種の貝に翻るのが、彩色した胡蝶の群がる風情。何とも言へない、と書いて居る下から、背負ひ重りのする荷は一步づゝ重量が掛る、草臥はする、汗には成る。荷かつぎに續いて息せいた時分から、もう咽喉の渴きに堪へない。・・・・何處か茶店をと思ふのに、本街道は、元來、上の石山を切つて通るので、濱際は、もの好が歩くのだから、仕事をし居る、布さらし、鹽焼に、一杯無心する便宜はありませぬ。いくら俳諧師だと云つて、晝顔の露は吸へず、切ない息を吐いて、ぐつたりした坊さんが、辛うじて・・・・赤住まで来ると、村は山際にあるのですが、藁茸の小家が一つ。伏屋貝かと濱道へこぼれて居て、朽ちて崩れた外流に――見る
と、杜若の眞の瑠璃色が、濡色に咲いて二三輪。

可心は、そこを書くための用意だか何うだか、そ

れまでの記事のうちに、一ヶ處も杜若を記して居ません。

「其の癖、ほんの片浦を見ました。私の目にも。」

小山夏吉は、炬燵に居直つて言ふのである。

「湖、沼、池の多い土地ですから、菖蒲杜若が至る處に咲いて居ます。」
「今此襖へでも、障子へでも、二條ばかり水の形を曳いて、紫の花をあしらへば、何村、どの里……それで様子がよく分るほどに思ふのです。」
「大笹の宿へ入つても、中庭の縁に添つて咲いて居たと申しましたつけ。

「社若の花を小褰に、缺盥で洗濯をして居る、束ね髪で、窠々しいが、（其の姿のいうにやさしく、色の清げに美しさは、古井戸を且つ蔽ひし卵の花の雪をも欺きぬ。……類なき艶色、前の日七尾の海の渡船にて見参らせし女性にも勝り

て)と云つて (さるにて
も、此の若き女房、心頑に、情冷く、言はむ方な
き邪慳にて、) とのつけに遣ツつけたから、讀ん
で居て吃驚すると、

(茶を一つ給はれかし、御無心) と頼んだのに、

(茶屋はあちらに。) ー

と云つて斷つたのです。耳が聞えないんですから、
其の女は前途へ指さしてもしたらしい。

(いや、われらは城下のものにて、今度、浦々を見
物いたし、またこれよりは瀧谷の妙成寺へ、參詣を
いたすもの、見受け申せば、我等と同じ日蓮宗の御
様子なり。戸のお札をさへ見掛けての御難題、坊主
に茶一つ恵み給ふも功德なるべし、わけて、此通り
耳も疎し、獨旅の辿々しさもあはれまれよ。) と
瘦法師が杖に縋つて、珠數まで揉みながら、づつと
寄ると ー ついと退く。端折つた
白脛を、卯の花に、はら／＼と消し、眞白い手を、
衝と掉つて押退けるやうにしたのです。芋を石にす
る似非大師、むか腹を立て、洗濯もの黒くなれと、
眞黒に呪詛つて出た! (あゝ、われこ

そは心頑こころがたくなに、情なさけなく邪慳無道じやけんむだうであつたづれ。耳みみうと
きもの人ひと十倍じふばい、心こころのひがむを、疾やまひなりとて、神かみに
も人ひとにも許ゆるさるべしや。と追おつつけ、慚愧後悔ざんきこうわいを
するのです。

能登のとでは、産婦さんぶのまだ七十五日にちを過ぎすないものを、
（あの姉ねえさんは、まだ小屋こやの中うち、）と言いふ習慣ならはし
のあるくらゐ、黒島くろしまの赤神あかがみさま様と申まをして荒神あらがみで、
嚴きびしく不淨ふじやうを嫌きらはるゝ。社やしろまはりでは産小屋うぶこやを別べつに立た
てて、引籠ひきこもる。それまではなくとも、浦濱うらはま一體いつたいに其そ
の荒神あらがみを恐おそれました。また靈驗れいけんのあらたかさ。可心かしん
は、黒島くろしまでうけた御符おふだを、道中安全だうちうあんぜん、と頭陀袋づたぶくろにさ
して居あた。

飛とんでもない。……女をんなが洗あらつて居あたのは、
色いろのついた、うつ木の雪ゆきの一枚いちまいだつたと言いふのです。

振返ふりがへつて、一睨ひとにらみ。杜若かきつばたの色いろも、青あをい蟲むしほどに小ちひ
さく成なつた、小高こたかい道みちに、小川をがはが一條ひとすぢ流ながれる。枚いたの
橋はしが掛かつた石段いしだんの上うへに、廻縁まはりえんのきれいなのが高たかく見み
えた。――橋はしの上うへに、兄弟きやうだいらしい男をとこの子こが、二ふた

人遊んで居たので、もしやと心頼みに、茶を一つ、其よし頼むと、すぐに石段を駈上り縁を廻つたと思へば、十歳ばかりの兄の方が、早く薄べりを縁に敷いた。其處へ杖を飛ばしたさうです。七十ぐらゐの柔和なお婆さんが煙草盆を出してくれて、すぐに煎茶を振舞ひ、しかも、嫁が朝の間拵へたと、小豆餡の草團子を馳走した。その風味のよさ、嫁ごと云ふのも、容色も心も奥ゆかしい、と戴いて居ます。が、此の嬉しさにつけても思ふ、前刻の女の邪慳さは、さすがに、離れた土地ではないから、可心も何にも言はなかつた。其の事が後に分ります。．．．此の一構は、村の庄屋で。．．．端近へは姿も見えぬ、奥深い床の間と、あの砂濱の井戸端と、花は別れて咲きました。が、いづれ菖蒲、社若。．．．二人は邑知《瀉の汀に、二本のうつくしい姉妹であつたんです。

長話はしたが、何にも知らずに．．．可心は再び杖を曳いて、それから二三町坂を上ると、成程、一寸した茶店もあつた。．．．泊を急いで、．．．高濱の宿へ着きました。

可心はまだ川を渡らない。川を渡る、其處が……すぐ大笹の宿の前を流れて米町川の海に灌ぐ處なんです。百年前可心は、いま其の紀行で、――鑛泉宿の眞夜中の松を渡る風にさへ、さら／＼と私の寢床に近づきました。」

小山夏吉は杯を取った。

「高濱では、可心に相宿がありました。……七歳ばかりの男の子を連れた、五十近い親仁で、加賀の金石の港から、其の日漁船の便で、海上十六七里――當所まで。此さへ可なり冒険で。これからは浪が荒いから、外濱を徒歩で輪島へ行く。此の子の姉を尋ねて、と云ふ。――日曜に、洋服を着た子の手をひいたのでないと、父親の、子をつれた旅は、いづれ遊山ではありません。何となく、貧乏くさい侘しいものです。私なども覺があります。親仁は問はずがなりに、姉娘は、輪島で遊女のつとめをする事。此の高濱は、盆前から夏一杯、入船出船で繁昌し、一浦が富貴する。……其の頃には、七尾から山越で。輪島からは海の上を、追立

てられ、漕流こぎながされて、出稼でかせぎの賣色つとめに出る事こと。中なかにも船ふねで漂たふよふのは、あはれに悲かなしく、淺あさましい・・・・身からだの丈夫ぢやうぶで賣盛うれさかるものにはない、弱よわい女をんなが流ながされる。　（姉あねめも、病身びびしんぢやによつて、）　と蜘蛛くの巣すだらけの煤すすけ行燈あんどんに悄乎しよんほりして、突伏つゝぶして居睡あねむる小兒こどもの蚊かを迫おひながら、打語うちかたる。・・・と御坊ごぼうは縁起えんぎで云いふのですが。

――場所ばしよと言いひ、境遇きやうぐう言いひ、それが其そのまゝ、私わたしの、戀こひの、お優いうさんの　――」

小山こやま夏吉なつきちは肩かたを落おとして、兩手りやうてを炬燵こたつにさし入れた。　「電燈でんとうが暗くらく成なつたやうです。・・・・目のせみか知しれませんか。何なんですか、小ちひさな紫むらさき　が、電燈でんとうのまはりをちら／＼します。

大雨おほあめ大風おほかせに成なりました。

可心かしんが、翌日よくじつ、朝あさがけに志こころす、瀧谷たきだにの妙成寺めうせいじは、其處そこから僅わづか二里にり足たらずですが、間道かんだうにかゝると云い

ふ。例の荷はあり、宵の間に荷かつぎを頼んで置いたが、此の暴風雨では出立出来ようかと、寝られない夢に悩んだ。風は、いよ／＼強い、しかし雨は小降に成つて、朝飯の時、もう人足が来て待つて居ると、宿で言ふので。

杖と並んで、草鞋を穿く時、さきへ宿のものの運んだ桐油包の荷を、早く背負つて、髪を引きしめた手拭を取つて、颯と睨を染めて、すぐむかと思ふほど、内端におじぎをした婦を見ると、繼はぎの足袋に草鞋ばかり、白々とした脛ばかり、袖に杜若の影もさ／＼ず、着流した蓑に卵の花の雪はこぼれないが見紛ふものですか。引束ねた黒髪には、雨のまゝ水も垂りさうな・・・昨日の邪慳な女です。

御坊は、忽ち、むつとして――突立つて、すた／＼出ました。

こゝが情ない。聾の癖みで、昨日惱まされた、はじめの足疾な女に封するむか腹立も、彼是一齊に打撞つて、何を・・・天気は悪し、名所の見ど

ころもないのだから、とつ／＼、すた／＼、つん／＼、
聾が先へ立つて。合羽を吹きなぐりに、大跨に踏出した。

「あゝ、坊さんの佛頂面が、此方を向いて歩行いて來ます。」

小山夏吉は串戯らしいが、深く、眉を顰めたのである。

「従つて、對手を不機嫌にした、自分を知つて、偶然に其の人に雇はれて貸錢を取る辛さは、蓑もあら蓑の、毛が針と成つて肉を刺す。．．．．．撫肩に重荷に背負つて加賀笠を片手に、うなだれて行く細り白い頸脚も、歴然目に見えて、可傷々々しい。

聲を掛けて、呼掛けて、然も聾に、大な聲で、婦の口から言譯の出来る事らしくは思はれない。．．．吹降ですから、御坊の頭陀袋に、今朝は、赤神の形像の顯れて居なかつた事は、無論です。

家並を二町ほど離れて來ると、前に十一二間幅の

川が、一天地押包んだ巖山の懐から海へ灌いで居る。・・・・・

（翌日、私が川裳明神へ詣らうとして、大笹の宿の土橋を渡らうと、渡りかけて、足がすくみました。其處は、おなじ一米町RTよねまち》川の上流なんですから。——）

其の海へ落口が、どつと濁つて、流が留まつた。一方、海からは荒浪がどん／＼と打ツつける。丁ど其の相激する處に、砂山の白いのが築洲のやうに成つて、向う岸へ架つたのです。白砂だから濡れても白い。・・・・・鵜の橋とも、白瑪瑙の欄干とも、風の凄じく、眞水と潮の戦ふ中に、夢見たやうな、——此は可恐い誘惑でした。

暴風雨のために一夜に出来た砂堤なんです。お断りするまでもありませんが、打つて寄せる浪の力で砂を築き上げる、川も増水の勢で、砂を流し／＼、浪に堰かれて、相逆つて其處に砂を装上げる。

能登には地勢上、これで出来た、大沼小沼が、海岸にはいくともあります。――河北潟も同一でせう。がそれは千年！五百年、五十年、日月の築いた一種の橋立です。

いきなり渡つて堪るものですか。

聾ひがみの向腹立が、何おのれで、渡をきよも、尋ねもせず、足疾にづか／＼と踏掛けて、二三間ひよこ／＼發奮んで傳はつたと思ふと、左の足が、ずぶ／＼と砂に潜つた。あつと抜くと、右の方がざくりと潜る。わあとニきにニく、檜木笠を、高浪か横なぐりに撲りつけて、ヒイと引く息に潮を浴びせた。

杖は徒に空に震へて、細い塔婆が倒れさうです。白い手が其の杖にかゝると、川の方へぐいと曳き、瘦法師の手首を取つた救の情に、足は抜けた。が、御坊はもう腰を切つて、踏立てない。．．．．魔の沼へ落込むのに怯えたから、尻を餅について、草鞋をばちや／＼と、蠅の脚で匆ねる所へ、浪が、浪が、どぶん――

「お助け。――」

波がどぶん。

目も口も鼻も一時にまた汐を嘗めた。

「お助け――」

濤がどぶん。

「お助け――」

耳は聾だ。

「助けてくれ――」

川の方へ、引かう／＼として居た、其のうつくしい女の、優しい眉が屹としまると、蓑を入れちがひに砂堤に乗つて、海の方から御坊の背中を力一杯どんと壓した。ずる／＼ずると、可心は川の方へ摺落ちて、丘の途中で留まつた。此分なら、川へ落ちたつて水を飲むまでで生命には別條はないのに。あゝ、入替つた、うつくしい人の雪なす足は、忽ち砂へ深く埋つたんです。・・・・・・

吻と一息つく間もない、吹煽らるゝ北海の荒浪が、どーん、どーんと、唯一處の如く打上げる。・・・・

・ ・ ・ 歌麿の繪の蛭でも、かくの如くんば溺れます。
二打ち三打ち、頰るゝ潮の黒髪を洗ふたびに、顔の色が、しだいに蒼白にさせて、いま却つて雲を破つた朝日の光に、濡蓑は、颯と朱鷺色に薄く燃えながら
ー ー 昨日坊さんを拂つたやうに、目口に灌ぐ浪を拂ひ拂ひする手が、亂れた乳のあたりに菱々と成ると、ひとつ寝の枕に、つんと拗ねたやうに、砂の衾に肩をかへて、包みたさうに蓑の片袖を横顔に衝と引いた姿態で、羽衣の翼は折れたんです。

可心は、川の方の砂堤の腹にへばりついて、美しい人の棄てた小笠を頭陀袋の胸に敷き、おのが檜木笠を頸窪にへし潰して、手足を張り縫つたまゝ、唯あれ／＼、あつと云ふ間だつた、と言ふのです。

ー ー 三年経つて、顔色は憔悴し、形容は脱落した、今度は眞個の墨染の鬢坊主が、金澤の町人たちに送られながら、新しい筵の縦に長い、箱包を背負つて、高濱へ入つて來ました。

・ ・ ・ ・ ・ 川口に船を揃へて出迎へた人数の中に
は、穴水の大庄屋、林水。黒島の正右衛門。 ・ ・ ・
・ ・ ・ 病氣が治つて、其の弟の正之助。その他、俳
友知縁が擧つたのです。可心法師の大願によつて、
當時、北國の名工が丹精をぬきんでた、それが明神
の神像でした。美しい人の面影です。 ー ー

村へ、はじめて女神像を据ゑたのは、あの草團子
のまはり縁で。 ・ ・ ・ ・ ・ 其家の吉之助と云ふの
の女房、即ち女神の妹は、勿論、姉が遭難の時、眞
さきに跣足で駈けつけたさうですが、

て。)
(あれ、あれ、お祝の口紅を。身がきれいになつ
と、云つて泣いたさうです。

姉が日雇に雇はれるとは知らなかつた。 ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ 中たがひをしたのでも何でもない。選んだ夫の
貧しい境遇に、安處して、妹の嫁入さきから所帯
の補助は肯じなかつた。あの時、 ー ー 橋で中よく
遊んで居た男子たち、却つて、其の弟の方が、姉さ

んの子だつたさうです。

此の妹が、凜として居た。土地の便宜上、米町川の上流、大笹に地を選んで、とに角、在家を土蔵ぐるみ、白壁づくり、假屋を合せて、女神像を其處へ祭つて、可心は一生堂守で身を終る覺悟であつた處。……

（お心はお察し申しますが、一つ棟にお住ひの事は、姉が何う思ふか、分りかねます。御僧をお好き申して助けましたか。可厭で助けましたか。私には分りませんから。）
妹がきつぱり云つた。

可心は、ワツと聲を上げて泣いたさうです。

其處で、可心一代は、づつと川下へ庵を結んで、其處から、朝夕、堂に通つて、かしづいて果てた、と言ひます。

此の庵のあとはありません。

時に不思議な縁で、其の妹の子が、十七の年、川

尻で　ー　同じ場所です　ー　釣をして居て、
不意に波に浚はれました。泳は出来たが、川水の落
口で、激浪に揉まれて、まさに溺れようとした時、
大な魚に抱かれたと思つて、浅瀬へ刎出されて助か
つた。其の時、艶麗、龍女の如き、をばさんの姿を
幻に視たゝめに、大笹の可心寺へ駈込んで出家し
た。これが二代の堂守です。處が、さいはひ、尚ほ
子があつたのに、世を譲つて、あの妹も、おなじ
寺へ籠つて、やがて世を捨てました。

川裳明神の像は、浪を開いた大魚に乗つた立像だ
さうです。

寺は日蓮宗です。ですが、女神の供物は精進では
ない。その折の蓑にちなんだのが、ばらみの、横み
の、鬢みの、髭の類、活毛さへまじつて、女が備へ
る、黒髪が取りつゝんで凄いやうです。船、錨、
ー　纜　が其のまゝ龍の形に成つたのなど、繪
馬が掛かつて居て、中にも多いのは、むかしの燈臺、
大ハイカラな燈明　臺のも交つて居ます。

「ー これは、翌日、大笹の宿で、主人を呼んで、それから聞いた事を或處は補ひましたし、
・ ・ ・
・ ・ ・ 後とは言はず、私が見た事も交りました。」
・
・
・

五

「
・ ・ ・ ・ ・ 此の女神の信仰は、いつ頃か、北
國に大分流布して、
・ ・ ・ ・ ・ 越前の方はどうか
知りませんが、加賀越中には、處々法華宗の寺に祭
つてあります。いづれも端麗な女體です。」

多くは、川裳を、すぐに獺 にして、河の神だと

も思つて居て、—— 實は、私が、寧ろ其の方だ
つたのです。—— 恐縮しなければなりません。

魔女だと言ふ。—— 實は私の魂のあり所だ

と思ふ、…… 加賀、金石街道の並木にあり

ます叢祠の像なぞは、此の女神が、眞夏の月夜に、

近いあたりの瓜畠—— 甜瓜のです—— 露の

畠へ、十七ばかりの綺麗な娘で涼みに出なすつた。

それを、村のあぶれものの悪少狡兒六人と云ふのが

矢庭に瓜番の小屋へ擔ぎあげて無禮をした、——

三年と經たず六人とも、ばた／＼と死んだために、

懺悔滅罪拔苦功德のためとして、小さな石地藏が六

體…… 丁ど、義經の—— 北國落の時、

足弱の卿の君が後れたのを、のびあがり／＼こゝで

待つたと云ふ—— (人待石) の土手下

に……

小山夏吉の顔は暗かつた。

「海の方を斜に向いて立つて居ます。私は此處で、

生死の境の事を言はねば成らなくなりました——

一杯下さい……

炬燵は巖のやうに見えた。

はじめよりして、判官殿の北國の浦づたひの探訪の毎に、色の變るまでだつた、夏吉の心が頷かれた。

「――能登路の可心は、僻みで心得違ひをしたにしろ、憎いと思つた女の、過つて生命を失つたのにさへ、半生を香華の料に捧げました。・・・

（――これは縁起に話しましたが――）

私なんぞ、眞個、此の身體を溝石にして、這面へ、一鑿、目鼻も口も、削りかけの地藏にして、其の六地藏の下座の端へ、もう一個、眞桑瓜を横嚙りにした處を、曝しものにされて可いのです。

――事實、また、瓜を食つて渴命をつないで居るのですから。」

と自棄に笑つた。が、酔もさめ行く、面の色とともに澄切つた瞳すゞしく、深く思情を沈めた裡に、

高き哲人の風格がある。

こゝは渠について言ふべき機会らしい。小山夏吉は工人にして、飾職の上手である。金屬の彫工、細工人。此の業は、繪畫、彫刻の如く、はしけやけき藝術ほど人に知られない。鑄金家、蒔繪師などこそ、且つ世に聞こゆれ。然も仕事の上では、美術家たちの知らぬはない、小山夏吉は、飾職の名家である。然も、其の細工になる瓜の製作は、殆ど一種の奇蹟である。

みずか
自ら渠が嘲つた。

「 ー ー 瓜を食つて生きて居る ー ー 」

いま藝術を論ずる場合ではないのだから、渠の手腕については敢て話すまい。が、其の作品のうちで、瓜 ー ー 甜瓜が讚美される。露骨に言へば、頻に注文され、よく賣れる。思ふまゝの地金を使つて、實物の大きさ、姫瓜、烏瓜ぐらゐなのから、小さなのは蠶豆なるまで、品には、床の置もの、香爐、香合、釣香爐、手奩の類。黄金の無垢で、簪の玉を彫んだのもある。地金は多くは銀だが、青銅も、臙銀も、

鳥金も・・・・・眞黒な瓜も面白い。皆、甜瓜を二つに割つて、印籠づくりの立上り靈妙に、其の實と、蓋とが、すつと風を吸つて、ぴたりと合つて、むくりと一個、瓜が据る。肉取り、平象嵌、毛彫、浮彫、筋彫、石め、鑿は自由だから、蔓も、葉も、或は花も此に添ふ。玉の露も鏤む。

いづれも打出しもので、中はつぎのなくくりぬきを、表の金質に好配して、黄金また銀の薄金を覆輪に取つて、しつくりと張るのだが、朱肉入、驕つた印章入、寶玉の手奩にも、また巻煙草入にも、使ふ人の勝手で異議はない。灰皿にも用ゐよう。が希くば、龍涎、蘆薈、留奇の名香。綠玉、眞珠、紅玉を装らせたい。某國　　公使の、其の一品を贈ものに使つてから、相傳へて、外國の註文が少くない。

唯、こゝに不思議な事がある。一度手に入れた顧客、また持ぬしが、人づてに、或は自分に、一度必ず品を返す。　　返して、禮を厚うして、蓋と實のいづれか、瓜のうつろの處へ、唯もう一鑿、何ものにて、手が欲しいと言ふのである。ほかの藝術

に於ける美術家の見識は知らない。小山夏吉は快
く此を諾して、情景品に適し、景に應じ、時々
心のまゝに、水草、藻の花、薄の葉、桔梗の花。鈴
蟲松蟲も一寸留まらうし、さゝ蟹も遊ばせる。或は
單に署名する。客はいづれも大満足をするのである。

外國へ渡つたのは、佛蘭西からと、伊太利、それ
から白耳義と西班牙から、公私おのゝ其の持ぬし
から、おなじ事を求めて、一度づゝ瓜を返したのに
は、小山夏吉も舌をまいて一驚を吃したさうである。
妙に白耳義が鬣肩で、西班牙が好きな男だから、瓜の
うつろへ、一つには螢を、頸の銅に色を凝らして、
烏金の烏羽玉の羽を開き、黄金と青金で光の影をぼ
かした。一つには、銀象嵌の吉丁蟲を、と言つて居
た。

恚う陳列すると、一並べ並べたゞだけでも、工賃作
料したゝかにして、堂々たる玄關構の先生らしい
が、然うでない。擧げたのは二十幾年かの間の折に
ふれた作なのである。第一、一家を構へて居ない。
妻子も何も持たぬ。仕事は子がひから仕込まれた、

―― 此は名だたる師匠の細工場に籠つて爲て、
懐中のある間は諸國旅行ばかりして漂泊ひ歩行く。

一向に美術家でない。鋳屋、鋳職を以て安んじて
居るのだから、井に蝦蟆口を突込んで、印半纏で
可ささうな處を、此男にして妙な事には、古背廣に
ゲエトルをしめ、草鞋穿で、鑿、鐵鎚の幾挺か、安
革靴で斜にかけ、何うかするとヘルメット帽などを
頂き、繻子の大洋傘をついて山野を渡る。土木の小
官吏、山林見廻りの役人か、何省お傭の技師と云ふ
風采で、お役人あつかひには苦笑するまでも、技師
と間違へられると、先生、陰氣にひそ／＼と嬉しが
つて、茶代を發奮む。曰く、技師と云へる職は、端
的に數字に齊しい。世をいつはらざるものだ、と信
ずるからである、と云ふのである。

(―― 夜話の唯今なども、玄關の方には件の
ヘルメットと、大洋傘があるかも知れない。)

が、甜瓜は―― 瓜を食つて生きて居る。――

―― 渠の言とともに、唐草の炬燵の上に、黄に
熟したると、半ば青きと、葉とともに轉がつた。

六

小山夏吉は更めて言を繼いだ。

「あの、金石街道の、——（人待石）
に、私は——其の一日、晝と夜と、二度ぐつ
たりと成つて、休みました。八月の半ば、暑さの絶
頂で、畠には瓜が盛の時だつたんです。年は十七で
す。」

晝の時は、まだ私といふ少年も、其生命も日南で、
暑さに苦しい中に、陽氣も元氣もありました。身の
上の事について、金石に他家の部屋借をして、避暑
かた／＼、勉強をして居る、小學校から兄弟のやう
に仲よくした年上の友だちに相談をして行つたんで
すから。或は希望が達しられるかも知れないと思つ
たので。

つまり、友だちが暑中休暇後に上京する。――
貧乏な大學生で。―― 其の旅費の幾分を割いて、
一所に連れて出て貰ひたかつたので。……

―― 父のなくなつた翌年、祖母と二人、其の日の糧にも困んで居た折から。

何、處が、大學生も、御多分に洩れず、窮迫して居て、暑中休暇は、いゝ間の體裁。東京の下宿に居るより、故郷の海岸で自炊をした方が一夏だけでも幾干か蹴出せようと云ふ苦しがり、連も相談の成立ちつこはありません。友だちは自炊をして居る……だから、茄子を煮て晩飯を食はしてくれましたが、いや、下地が黒い處へ、海水で色揚げをしたから、其の色と云つたら茄子のやうで、ですから、此だつて身の皮を剥いでくれたほどの深切です。何しろ、ひどい空腹の處へ、素的に旨味さうだから、ふう／＼蒸氣の上る處を、がつ／＼して、加減なしに、突然頬張ると、アチチも何も無い、吐き出せばまだ可いのに、渴ゑて居るので、殆ど本能の勢、と云つた工合で、呑込むと、焼火箸を突込むや

うに、咽喉を貫いて、ぐい／＼と胃壁を刺して下つて行く。．．．．．打倒れました。息も吐けません。きり／＼と腹が疼出して止りません。友だちが、笑ひながら、心配して、冷飯を粥に煮てくれました。けれども、それも、もう通らない。．．．．．酷い目に逢ひました。

横腹を抱へて、悄乎と家へ歸るのに、送つて来た友だちと別れてから、町はづれで、卵塔場の破垣の竹を拾つて、松並木を――少年でも、恚うなると、杖に縋らないと歩行けません。きり／＼激しく疼みます。松によつかゝつたり、薄の根へ踞んだり。．．．．．杖を力にして、その（人待石）の處へ来て、堪らなく成つて、どたりと腰を落しました。幹が横に、大きく枝を張つた、一里塚のやうな松の古木の下に、いゝ月夜でしたが、松葉ほどの色艶もない、藁すべ同然になつて休みました。あゝ、其處等に落散つて居る馬の草鞋の方が、餘程勢がよく見えます。

道を挾で、入口に清水の湧く、藤棚の架つた茶店

があつて、（六地藏は、後に直ぐその傍に立つたの
ですが、）——低く草の蔭に硝子の簾が透いて、
二つ三つ藍色の浪を描いた提灯が點れて、賑かなや
うな、陰気なやうな、化けるやうな、時々高笑をす
る村の若衆の聲もして居たのが、やがて、寂然とし
て、月ばかり、田畑が薄く光つて來ました。

あとまだ一里餘、此の身體を引摺つて歸つた處で、
井戸の水さへ近頃は濁つて惡臭し……七十
を越えた祖母さんが、血を吸ふ蚊の中に蚊帳もなし
に倒れて、と思ふと、疼む腹から絞るやうにひとり
でに涙が出て、人影もないから、しく／＼と兩手を
顔にあてて泣いて居ました。

（何うなすつたの。）
花の咲くの音はしません。……いつの
間にか、つい耳許に、若い、やさしい聲が聞こえて、
（お腹が疼いんですか。）

少年たち、病氣を見舞ふのに、別に、ほかに言
葉はないので………慥う云つてくれたのを、

夢か、と顔を上げて見ると、淺葱の切で、結綿に結つた、すゞしい、色の白い・・・私とおなじ年紀ごろの、あゝ、それも夢のやうな――此の日、午後四時頃のまだ日盛に――往きに此處で休んだ時――一足おくれて、金澤の城下の方から、女たち七人ばかりを、頭痛膏を貼った邪慳らしい大年増と、でつくり肥った膏親爺と、輕薄らしい若いものと、誰が見ても、人買が買出した様子なのが、此の炎天だから、白鷺も鴨も、豚も羊も、一度水を打つて、活をよくし、こゝの清水で、息を繼がせて、更に港へ追立てた・・・

・・・更に追つて行く。其の時、金石の海から、河北潟へ、瞬く間に立蔽ふ、黒漆の屏風一萬枚、電光を開いて、風に流す龍巻が馳掛けた、その餘波が、松並木へも、大粒な雨と諸ともに、ばら／＼と、鮒、沙魚などを降らせました。

龍巻がまだ眞暗な、雲の下へ、浴衣の袖、裾、消々に、冥土のやうに追立てられる女たちの、これはひとり、白鷺の雛かとも見紛うた、世にも美しい娘な

んです。」

彫玉の技師は一息した。

「……出稼の娼妓の一群が龍巻の下に松並木を追はれて行く。……此だけの事は、今までにも、話した事がありましたから、一度、もう、……貴下の耳に入れたかも知れません。」

君待て、佛國のわけしりが言つたと聞く。

「再びする談話を、快く聞く彼の女には、汝、愛されたるなり。」

筆者は、別の意味だが、同じ心で聞入つた。・

「朝顔の簪をさして居ました。――」

（　　）病氣ぢやないんです。僕はもう駄目な
んです、死にたいんです。）

事實、其のやさしい、恍惚した、そして、弱々し
い中に、目もとの凜とした顔を見ると、腹の疼いの
は忘れましたが。

（まあ。）

娘は熟と顔を見ました。

（私も死にたいの。）

龍巻のために、港を出る汽船に故障が出来た。

（前刻友だちと濱へ出て見た、然う言へば、
沖合一里ばかりの處に、黒い波に泡沫を立てて、鯨
が腹を赤く出して居た、小さな汽船が其なんです。）

（日暮方の出帆が出来なく成つた。雑用宿の
費に、不機嫌な旦那に、按摩をさせられたり、煽が
せられたり。濁つた生簀の、茶色の蚊帳で揉まれて
寝たが、もう一度、うまれた家の影が見たさに、忍
んで此處まで来たのだ、と言ひます。）

彌生の頃は、金石街道の此の判官 石の處から、
こゝばかりから、殆ど仙境のやうに、桃色の雲、一
刷け、櫻のたなびくのが見えると、土地で言ひます。
―― 町の其の山の手が、娘のうまれた場所なの
です。

（私は、うちにお父さんと、お爺さんが。）

（僕は祖母さん一人・・・）

（死んで、あの、幽霊になつて、お手つだひした
方が、・・・・え、其の方がまだと思つて
よ。）

（眞個です。死んだ方が可い。）

娘は、紅麻の肌襦袢の袖なしで、ほんの手拭で包
んだ容子に、雪のやうな胸をふつくりさして、浴衣
の肌を脱いで、袖を緋の抜帯に挟んで居ました。急
いで来て暑かつたんでせう。破蚊帳から抜出したの
で、帯もしめない。その緋鹿の子の扱帯が、白鷺に
鮮血の流れるやうです。

（こんなにして死ぬと・・・・・・検死の時、ま

るで裸はだかにされるんですつて　ー　)

(可厭いやだなあ。)

(手てだの足あしだの、引ひくりかへされるんですつ

て。　・　・　・　・　・　此この石いしの上うへでせうか、草くさの中なかでせ

うか。私わたし、お湯ゆに入るはひるのも極きまりが悪わるかつた。　ー　

でも、然さうやつて檢死けんしされるのを、死しねば　・　・

・　・　・　あの、空そらから、お振袖ふりそでを着きて見みて居あるから可

いわ。私わたしお裁縫ししとが少すこし出で来きます、貴方あなたにも、ちやん

と衣服きものを着きせますよ、お袴はかまもはかせませうね。)

私わたしは一刻いっときも早はやく、速すみやかに死しにたく成なつた。

其その拔帶しじきを托たくつて　ー　娘むすめが、一結ひとむすび輪わにし

たのを、引絞ひきしぼりながら、松まつの幹みきをよぢ上のぼつた勢いきほひの

よさと言いつたら。　・　・　・　・　・　それでも、往還わうくわんの路みち

へ向むかない、瓜畠つりばたけの方かたの太ふとい枝えだへ、眞中まんなかへ掛かけて、

兩方りやうほうへ、幻まぼろしの袖そでのやうな輪わを垂たらした。つゞく下枝したえだ

の節ふしの處ところへ、構かまはない、足あしが重かさなるまでも一所いっしょに踏掛ふみか

けて、人形にんぎやうの首くびを、藁苞わらづとにさして、打交ぶつちがへた形かたちに、

兩方りやうほうから覗のぞいて、咽喉のどに嵌はめて、同どうじ時に踏ふみはづして、

ぶらんこに釣下つりさがらうと云いふ謀反むほんでしてなあ。

用意が出来て、一旦ずり下りて、それから誘つて、
恚う、斜の大な幹ですから、私が先へ、順に上へ這
つたのですが、結綿の島田へ、べつたりと男の足を
繼いだやうで變です。娘の方<RTはう》も、<R
uby華奢な、柔い肩を押上げても、それだと、
爪さきがまだ、石の上を離れないで、勝手が悪い。
其處で、極めた足場、枝の節へ立てるまで、娘を
負ふ事に成りました。

一度、向合つた。

(まだ、名を知らない。)

(私、いう。)

(いう、勇。)

(あら、可哀相に、おてんばぢやありません。イ

の。)

(・・・あゝ、お優さん。)

(はい。)

(僕は、夏吉。)

(あれ、いゝお名ーー 御紋着も、紹が似合ふ

でせうね。)

お優さんは、肌襦袢を括つた細い紐で、腰をしめて、

(汗があつてよ、………堪忍ね。)

襟を、合はせたんですが、其の時、夕顔の大輪の
白い花を、二つうつむけに、ちら／＼と月の光が透
きました。乳の下を、乳の下を。

(や、大な蟻が。)

(あれ、黒子よ。)

月影に、色が桃色の珊瑚に成つた。

膝を極めて、――起身の娘に肩を貸す、此の
意氣、紺緝も緋緘で、神の如き名將には、勿體ない
やうですが、北の方を引抱へた勢は可かつた、が、
如何に思つても、十七の娘を負つて木登りをした經
験は、誰方もありません。松の上
へ………登れたかつて? ……飛んで
もない。一寸這つて上れさうでも、なか／＼腰が伸
せません。二度も三度も折重つて、摺り落ちて、し
まひには、私がどしんと尻餅を搗くと、お優さんは

肩かたに縋すがつた手を萎なえたやうに解といて、色いろつぼくはだ
けた褌つまと、男をとこの空脛からすねが二本ほん、少すこし離はなれて、名所めいしょの石いし
に挫ひしげました。

溜息ためいき吐ついてる、草くさの茂しげみを、ばさり、がさ／＼と、
つい、其處そこに黒くろく湧わいて、月夜つきよに何なんだか薄うすく動うごく。
あ、とお優いっさんは、媚なまめかしい色いろを亂みだして裾すそを縮ちぢめま
した。おや、鼯もぐらか、田鼠たねずみか。――透すかして見み
ると、ぴち／＼匆はねるのが尾をのやうで・・・..
とに角かく、長ながくないのだから、安あん心しんして、引ひつかまへ
ると、

(お魚さかなよ、お魚さかなよ。)

(鮒ふなのやうだ。)

掌てのひらには、餘あまるくらゐなのが、然しかも鰓えら、鰭ひれ、一いち面めん
に泥どろまみれで、あの、菖蒲しやぶいの根ねが魚さかなに成なつたと言いふ
話はなしにそつくりです。

これで首くびくゞりは見み合あはせて、二ふた人たりとも生いきる事こと
に成なりました。一寸ちよつと、おめでたい。

兩方で瞳を寄せるうちに、松の根を草がくれの、並木下の小流から刎出したものではない。晝間、龍巻の時、魚が降つた、あの中の一尾で、河北瀉から巻落されたに違ひない。晝から今に到るまで、雲から落ちながらさへ、魚は生命を保つ。而して此の水音をしたつて、路の向うから千里百里の思をして、砂を分けて來たのであらう。それまでにして魚さへ活きる。・・・こゝは魚賣が濱から城下へ往來をしますから、其が落したのかも分りませんが、思ふ存分の方へ引きつけて、お優さんも、おなじ意見で。

早速、草を分けて、水へ入れて遣りました。が、天から降つた、それほどの逸物だから、龍の性を帯びたらしい、非常な勢いで水を刎ねると、葉うらに留まつた、秋近い螢の驚いて、はら／＼と飛ぶ光に、鱗がきら／＼と青く光りました。

（食べれば可かつたなあ、彼奴。ーー あゝ、お腹が空いて動くことも出来ない。僕はーー）
（まあ、可哀相に、あんなに苦勞したお魚

を・・・・・・)

其の癖、冷い汗が流れるほど、腹が空いて、へと／＼だと、お優さんも言ふんでせう。・・・

父は　　―　　同じ鋸職だつたんですが、盛な時分、
二三人居た弟子のうちに、何處か村の夜祭に行つて、
いゝ月夜に、廣々とした畑を歩行いて、彼方にも茅
屋が一つ、此方にも茅屋が一つ。其の屋根に狐が居
たとか、遠くで砧が聞えたとか。つまり畑へ入つて
瓜を盗んで食ふうちに、あたり一面の水に成つて、
膝まで来て、胴へついて、素裸になつて、衣ものを
背負つて、何うとか　　・・・つて、話をする
のを、小兒の時、うと／＼寝ながら聞いて、面白く
つて堪らない。あの話を　　―　と云つて、よく其
の職人にねだつたものです。

只惡戯にさへ嬉しい處を、うしろに瓜畑があります。

―　　路近い處には一個も生つて居ませんから、
二人して、づつと畑を奥へ忍ぶと、もこ／＼と月影

を吸つて、其處にも、此處にも、銀とも、金とも、
紫とも、皆薄青い覆輪して、葉がくれの墨繪もお
もしろい。月夜に瓜畑へ入らないでは此の形は分り
ません。いや、お優さんと一所でなくては。――
一個、掌にのせました。が夜露で、ひやりとし
て、玉の脊、珊瑚の枕を据ゑたやうです。雲の形が
葉を擴げて、淡く、すい／＼と飛ぶ螢は、瓜の筋に
銀象嵌をします。此の瓜に、朝顔の白い花がば
つと咲いた。……結綿を重さうに、娘も膝に
袂を折つて、其の上へ一顆のせました。いきなり齒
を當てると、むし齒に成ると不可いと、私のために
簪の柄を刺して、それから、皮を取つて、裂目を
入れて、兩つに分けて、とろ／＼と唇が觸つたか、
觸らない中に――

いまのニ鼠、田鼠の形を、凡そ三百倍したほど
な、黒い影が二つ三つ五つ六つ、瓜畑の中へ、むく
／＼と湧いて、波を立てて、うねつて起きた。

(泥棒。)

(どツ、泥棒。)

と喚くや否や、狼のやうに人立して、引包んで
飛かゝつた。

(あれえ。)

(阿魔ちよは、番小屋へかつげ。)

(此の野郎。)

(二才め。)

私は仰向けに撲飛ばされた。

(身もんだえしやがると、棒しばりにして、俺等の小便をしつかけるぞ。)

(村のお規則だい。)

(堪忍して、堪忍して……)

娘の聲は、十二本の足の眞黒な可恐い獣の背に、
白い手を空にして聞こえました。

瓜番小屋は、あゝ、あゝ血の池に掛けた、棧敷の
やうに、鐵が煙りながら宙に浮く。……
知らなかつた。――直き近い處にあつたのです。

（きれいな黒子ほくろだな、こんな處ところに、よう。）――
私わたしの目めからは血ちが流ながれた。瓜うりは皆眞紅みなまつかに成なつて、
葉はごとに黒くろい浪打なみうつ中なかを、體からだは、たゞ地ちを摺すつて轉ころ
がつた。

心しんぞう中み見みた見みた、並木なみきの下したで、

心しんぞう中み見みた、見みた、並木なみきの下したで、
しかも皓齒しろはと前髪まへがみで。・・・・・

心しんぞう中み見みた、見みた、並木なみきの下したで、
しかも皓しろ

齒は
・・・・・

番小舎ばんごやの中なかから、優やさしく、細ほそい、澄すんだ聲こゑで、お
優いうさんの、澄すまして唄うたふのが聞きこえました。「

小山夏吉こやまなつきちは、聲こゑが切せまつて、はら／＼と落涙らくるゐした。

「お聞ききに成なつて、何どう、お考かんがへなさるでせう？
私わたしには、其その時とき、三みつつだけ、する事ことがありまし
た。・・・・・

首くびをくゝる事こと、第一だいいち。すぐ傍わきの茶店ちやみせへ放火はうくわする、
家いへを焼やいて、村むらのものを驚おどろかす事こと、第二だいに。第三だいさんは飛とび
込こんで引縛ひっくられて小便せうべんを、これだけは何どうも不可いけな

い・・・どいつも私に二嵩ぐらゐ、村角力らしいのも交つて、六人居ます。

間に合ふ、合はないは別として、私は第二の手段を選ぶのが、後に思ふ、と、娘に對する義務ではなかつたかと思ふのです。僅に復讐の意義をかねて。

「えゝ、火の用意は、と言ふんですか？・・・煙草のために燐寸がありました。それでなくても、黒くなつた畑の上に、松の枝に、扱帯の絆の輪が、燃えて動いて居るんです。そればかりでも家は焼けるのに、卑怯な奴で、放火が出来ない。第一の事を、と松に這寄つた時、お優さんの唄が聞こえましたのは、――發狂したのでせうのに、――

（――此通りあきらめました。死なゝいでお歸りなさい、――）

然う言つてくれるのだと、身勝手ばかり考へて、

松の根もとに蔓が見える、

お前末代わしや一期・・・

一期末代添はうとしたに、

松も蓐も、もう見えぬ！　――　と
又唄ふ。

え、其の蓐と云ふ紅い實も、火をつけて、火をつけて、とうつくしい、伶俐な娘か教へたのかも知れないのに……耳を塞ぎ、目を瞑つて、轉んだか、躓いたか、手足は血だらけに成つて、夜のしら／＼あけに、我が家で、バツタリ倒れたんです。

並木で人の死んだ風説はきかない。……
翌月、不意の補助があつて、東京へ出ました。」

（すぐに或技藝學校を出たあとを、あらためて名匠の内弟子に入つたのである。）

「やつと一人だちで故郷へ歸る事が出来て、やがて十年前に、前申したわけで六地藏が彼處へ立つたと聞きました頃には、もう山櫻の霞の家も消えて居る……お優さんの行方は知れません。生命はあつたのでせう。いづれ遣手が掛つたのでせう。おなじやうに、昇がれて、連れ戻されて、鱗の落ち

た魚、毛のあか膚に成つた鳥は、下積に船に積まれて、北海の浪に漾つたのでせう。けれども、汽車は、越前の三國、敦賀。能登の富來、輪島。越中の氷見、魚津。佐渡。また越後の糸魚川、能生、直江津。――其の何處へ賣られたのか、捜しやうがなかつたのです。

六人が、六條、皆赤い蛇に惱まざるゝ、熱の譚言を叫んだと云ふ、其の、渠等に懲罰を給はつた姫神を、川裳明神と聞いて、怪しからんことには――前刻も申した事ですが、私も獺。だと思つて、其の化身にされたのを、お優さんのために、大不平だつた。松の枝の緋鹿子を、六人して、六條に引裂いて、……。畜、畜生めら。腕に巻いたり、首に掛けたり、腹巻はまだしも、股に結んで弄びなぞして居やがつた。拂つて淨めて、彼處の祠に納めたと聞いてさへ、何故か、扉を開けようとはしませんでした。赤い蛇を恐れたのではないのです。――私は實は、めぐり合つて、しめ殺されたい。

殺されて、さうして、彼奴等より尚ほ醜い瓜かじ

りの頬かけ地藏を並べれば可いんです。」

小山夏吉の旅行癖が　　―　　諸君によくお分りに

成つたと思ふ。

―　大笹の宿で、しかも、此の、大笹村にあ

る．．．．．思ひかけず、其の姫神の縁起に逢つた。私は、直ぐに先祖の系圖を見る眞剣さと、うまれぬさきの世の履歴を讀む好奇心と、いや、それよりも、戀人にめぐり逢ふ道するいべの地圖を見る心の時めきで、讀む手が思はず盡へました。

川裳明神の縁起　　―　　可心、述．．．．．

「大笹の宿の其の夜、可心の能登紀行で、川裳明神の本地が釋然としました。跪かなければなりません。私は寝られませんか。」

「何故か、庭の松の樹を、一度見ないでは、何うしても氣が濟まなく成りました。手ぐりつけられるやうに。……金石街道でお優さんと死なうとした、並木の松に、形がそつくりに見えて忍耐がならないのです。」

「――勝手は心得て居ましたから、雨戸を開けました。庭の松が、たゞ悚然とするほど、その人待石の松と枝振は同じらしい。が、何の杖にも首を縊る扱帯は燃えては居りません。寝そびれた上に、もう恚うなつては、葉がくれに、紅いのがぶら下つて居ようも知れないと、跣足でも出る處を、庭下駄があつたんです。」

「暗夜だか、月夜だか、覺えて居ません。が、松の樹はすや／＼と息を立てて、寝姿かと思ふ静さで、」

何だか、足音を立てるのも氣の毒らしい。三度ばかり、こんもりと高い根を廻りましたが何にも見えません。茫然と、腕組をして空を視めて立つた、二階の棟はづれを覗いて、梟が大きく翼を擴げた形で、又おなじやうな松が雲の中に見えるんです。心を曳かれて、うつかりして木戸を出ました。土が白い色して、杜若の花、紅羅の蒼も、色を朧に美しい。菜萸の樹を出ますと、眞夜中の川が流れます。紀行を思ふと、渡るのが危つかしい。生えた草も又白い。土橋の上に、ふと二個向合った白いものが見えました。や、女だ！ これは。．．．いくら田舎娘だつて、まだ泳ぐには。――思はず、私が立停まると、向合ったのが兩方から寄つて、橋の眞中へ並んで立ちました。其時莞爾笑つたやうに見えたんですが、すた／＼と橋を向うへ行く。跣足です。よく見ると、まるの裸體。．．．いや、然うでない。あだ白い脚は膝の上、殆どつけ根へ露呈なのですが、段々瞳が定まると、眞紅な紅羅の花を簪にして、柳條笹のやうな斑の入つた薄い服、――で青いんだの、赤いんだの、菜萸の實が玉の如く飾つてある。――また頻に鳴く――蛙の皮の疣々

のやうでもあります。さうして、一飛づゝ大跨に歩
行くのが、何ですか舶來の踊子が、ホテルで戸惑を
したか、銀座の夜中に迷子に成つた様子で。其の癖、
髪の毛は黒い、ざら／＼と捌いたおさげらしい。其
のぶら下つた毛の中に、兩方の、目が光る。．．．
．．．あゝ、あとびつしやりをする。．．．
然うでないと、目が背中へつくわけがない、と吃驚
しました。しかし一體、どつちが背だか腹だか、開
けた胸も腹も、のつぺらぼうで、人間としての皮の
縫目が分りません。

少し上流の方へ傳つて行くと、向う左へ切れた、
畝道の出口へ、おなじものが、ふら／＼と歩行いて
来て、三個に成つた。三個が、手足を突張らかして、
箸の折れたやうに、踊るふりで行くと、ばちや／＼
と音がして、水から又一个這上つた。又その前途に、
道の兩側に踞んで待つたらしいのが、ぼんと二個立
つと、六個も揃つて一列に成りました。逆に川下へ
飛ぶ、ぴかり／＼と一つ大な螢の灯に、皆背が低い。
尤も、づつと遠くなつたのだから、そのわけかも知
れませんが、三尺二尺、五寸ぐらゐに、川べりの田

舎道かみち遙はるかに成なると、ざあと雨あめの音おとがして、流ながれの片側かたがは、
眞暗まっくらな大おほきな竹藪たけやぶのざわ／＼と動うごいて眞暗まっくらな處ところで、フ
ツと吸すはれて消きえました。

眞個ほんとうに降ふつて來きた。私わたしは、いつか橋はしを渡わたつて居ゐた
のです。

ー ー 小雨こさめに、じつとりと成なつた、と思おもつたのは、
冷つめい寝汗ねあせで。 私わたしは八ツと目めが覺さめました。
ー

八

「翌朝よくあした思おもひのほか寝過ねすごして、朝湯あさゆで少すこしはつき

りして、朝飯を取ります頃は、からりと上 天氣。
もう十時頃で、田舎はのんきですから、しらゝ、明
もをんなじに、清々しく、朗かに雀たちが高轉で
遊んで居ます。蛙も鳴きます。旅籠の主人に、可心
寺の聞きたしをして――（女神は、まつたく活
きておいでなさる。幽寂とした時、ふと御堂の中で、
チリンと、幽な音のするのは、簪が揺れるので、
その時は髪を撫でつけなさるのださうで。）と聞
く時分から、テケテケテン、テトドンドンと、村の
何處かで……遠い小學校の小兒の諸聲に交
つて、靜に冴えて、松葉が飛歩行くやうな太神樂の
聲が聞えて、それが、笏に響きました。

おゝ！ 此處に居る。―― 流に添つて、上の
方へ三町ばかり、商家も四五軒、どれも片側の藁葺
を見て通ると、一軒荒物屋らしいの、横縁の端へ、
煙草盆を持出して、六十ばかりの親仁が一人。角ぶ
ちの目金で、熟と―― 別に見るものはなし、人
通も殆どないのですから、すぐ分つた、鉢前が大きく
茂つた南天燭の花を――（實は嘸ぞ目覺からう）
―― 悠然として見て居た。ほかに、目に着いた

ものはなかつたのですが・・・宿で教へられ
た寺の入口の竹藪が、つい其處に・・・川
は斜に曲つて、巖が嶮く成り、道も狭く、前途は、
もう田畝になります。――其の藪の前の日向に、
ぼつたら焼の荷に廂を掛けたほどな屋臺を置いて、
おゝ！ 此處に居る。太神樂が、黒木綿の五紋の着
流しで鳥打帽を被つた男と、久留米緋にセルの袴を
裾長に穿流した男と、頬杖を突合つて休んだのを見
ました。端初、夢に見た藪にそっくりだ、と妙な氣
がした處へ、此の太神樂で陽氣に成つた。其のまゝ
すれ違つて通つたのです。

向つて、たら／＼と上る坂を、可なり引込んで、
どつしりした茅の山門が見えます。一方は其の藪疊
みで、一方は、ぐつと崖に窪んで、じと／＼した一
面の茗荷畑。水溜には杜若が咲いて居ました。上り
口を一寸入つた處に、茶の詰襟の服で、護謨のぼろ
靴を穿いて、ぐた／＼のパナマを被つた男が、撥で
掌を敲きながら、用ありさうに立つて居る。處へ、
私がりかゝると出會がしらに、横溝を跨いで、藪
からぬつくりと、顯はいれたのは、でつぶりと肥つ

た坊主頭で、鼠 木綿を尻高々と端折つて、跣足で
鍬をついた。……（此がうつくしい伯母
さんのために出家した甥だと、墨染の袖に、其の杜
若の花ともあるべき處を）茗荷を掴み添へた、
眞竹の子の長い奴を、五六本ぶら下げて居ましたが、

（ぢやあ、米一升で何うぢやい。）
すぐ恚う云ふと、詰襟が、

（さあ、それですがね。）
（錢、五貫より、其の方が割ぢやぜい——は
つ／＼はつ。稗まじりぢやらうが、白米一升、どな
いにしても七十錢ぢや。割ぢやるがい。はつ／＼は
つ。）

泥足を捏ねながら、肩を揺つて、大きに御。

給金の談判でした。ずん／＼通り抜けて、寺内へ
入ると、正面がツツと高縁で、障子が閉つて、茅葺
ですが本堂らしい。左が一段高く、其處の樹林の中
を潜ると、並んでは居ますが棟が別で、落葉のまゝ
に甍が見えます。階を上ると、成程、繪馬が澤山
に、正面の明神の額の下に、格子にも、棧にも、女

の髪かみの毛けが房ふさ々と掛かつて居ゐます。紙かみで巻まいたり、水みづ引ひで結むすんだり、で引ひいて見みましたが、扉とびらは錠ぢやうが下おりて居ゐます。虹にじの帳とぼり、雲くもの天てん蓋がいの暗くらい奥おくに、高たかく壇だんをついて、佛ぶつ壇だん、厨づし子しらしいのが幕まくを絞しぼつて見みえますが、すぐすぐに像すがたが拝をがまれると思おもつたのは早さう計けいでした。第一だいいち女神ぢよしんでおいでなさる。まづ拝はいして、繪ゑ馬まを視みて、しばらく居ゐました。とに角かく、厨くり裡りへ案内あんないして、拝はい見けん．．．．．を願ねがはうと．．．．．それにしつても、竹たけの子こ上しやう人にんは納なつ所しよなのか知しら、法ほつ體たいした寺てう男おとこか知しら．．．．．

女神ぢよしんの簪かんざしの音おとを、故わざとでなく聞きかうとして、少しば時らくうつかりしたものと見みえます。何な故ぜといふに、いま、樹こた立たちの中なかを出でますと、高たか縁えんの突とつ端ぱしに薄うす汚よこれたが白しろ綸りん子すの大おほ蒲ふ團とんを敷し込こんで、柱はしらを背せ中なかに、酒さけやけの胸むなはだけだけで、大おほ胡あ坐くわを搔かいたのは藪やぶの中なかの大おほ入にふ道だう．．．．．納なつ所しよどころか、當たう山ざんの大だい和わ尚しやう。火ひ鉢ちを引ひ寄よせ、脛すねの前まへへ、一いつ升しやう 徳とく利りを据すゑて、驚おどきましたなあ　　茶ち碗わん酒ざけです。

門もん内ないの廣ひろ庭にはには、太だい神か樂くらが、ほかに最もう二ふた人たり。五

人と揃つて、屋臺を取巻いて、立つたり、踞んだり、中には赤手拭を一寸頭にのせたのも居て、――これは酒ぢやない、大土瓶から、茶をがぶ／＼、井の古澤庵を横嚙りで遣つてると、破れかゝつた厨裡の戸口に、霜げた年とつた寺男が手を組んで考へた面つらで居る處。

けた／＼けたと、和尚が化笑を唐突に遣つたから、私は肩をすぼめて、山門さんもんを出た。

何と、こんな中へ開扉が頼まれますものですか。尚ほ驚いたのは、前刻の爺さんが同じ處で、まだ熟じつと南天燭の枝えだぶりを見て居た事です。――

一度宿へ歸つて出直さうと其處まで引返したのですが、考かんがへました。其方そち此方ちひるすぎだ、歸れば都合つがふで膳ぜんも出さうし、かた／＼面倒めんたうだ。一曲いっしきか二曲にきよくか、太神樂たいかぐらの納をせるまで、と又寺の方はうへ。――

テンドンドン、テケレンと、囃子はやしがはじまる。少し坂さかを上あがつて、恚いかう、透すかしますと、向むかう斜ななめにづつと覗のぞ込む、生垣いけがきと、門もんの工合くあひで、赤あかい頭あたまばかりが鞆まりの

やうに、ぴよん／＼と、垣の上へ飛ぶのと――
柱を前へ乗出した和尚の肩の處が半分見える。いま
和尚の肩と、柱の裏の壁らしく暗い間に、世を忍ぶ
風情で、二娜と、それも肩から上ぐらゐ、あとは和
尚の身體にかくれた、婦が見えます。

はつと思つた。

髪は艶々と黒く、色は白と思ふのが、凄いほど
美しい。

が、近づけません、いや、寄つて行けない。せめ
て一人、小兒でも、そこらに居てくれれば可いので
すが、小學校の聲ばかりまた遙に響くんです。私
唯一人………それに食べものが出て居
る………四十面を下げたものが、其處へ顔が
出せますか。

殊に、佳い女、と思ふほど、こゝにうそ／＼居て、
此の顔が見えよう。覗くのさへ氣がさしますから、
思切つて、村はづれの田畝まで、一息に離れました。

蛙がよく鳴いて居ます。其の水田の方へ、睨へ切

れて、蛙が、中でも、こと／＼ころ／＼、よく鳴頻つてる田のへりへ腰を落し、ゆつくり煙草を吹かして、先づ彼の南天老人を極めました。

—— 少時して、こゝを、二人ばかり人が通る。．．．．．屋臺を崩して、衣装葛籠らしいのと一所に、荷車に積んで、三人で、其は躡の本道をゆきます。太神樂も、なか／＼大仕掛なものですな。私の居た躡へ入つて来た其の二人は、紋着のと、セルの袴で。．．．．．田畝の向うに一村藁屋が並んで居る、其處へ捷徑をする、．．．．．先乗とか云ふんでせう。

私は、笑ひながら、

(お寺の、美人はいかゞでした。)

對手が道化ものだから、此のくらゐな事は可い、と思つた。

(別嬪？ お寺に。)

とセルが言ふと、

(辨天様があるのかね。)

と紋着が生真面目です。

私はまごついた。

(いゝや、和尚の、かみさんだか、
何ですかね。)

(はゝゝ、御串戯もんだ。)

(別嬪が居て御覧じろ、米一升のかはりに引攪つ
了ふ。)

と笑ひながら、さつさと行きます。

はぐらかすとは思へません。

―― はてな、それでは、いま見たのは。――

何にしても太神樂は、もう濟んだのですから、
ぐに可心寺へ出向く筈の處を、少々居迷つたのは、
前刻から田の上を、ひよい／＼と行る蛙 連中が、
大小 ー 何うもをかしい。 . . . 生りは

じめの瓜に似て居る。 . . . こんな事はある
ません。泳ぐ形は、そんなでもないが、ひよんと構
へたり、腹を見せて仰向けに反つた奴などは、其の
まゝです。瓜の嬰兒が踊つて居る。 . . . そ
れに、私は踏込んで見る氣はありませんでしたが、
此の二三枚を除いたほかは、つゞく畠で、氣の所爲

か、一面に瓜が造つてあるやうです。蛙どもは、ひ
よん／＼と飛ぶ。すい／＼泳ぐ。ばちやりと刎ねる。
何うもをかしい。其のうちに、隣のじと／＼した廢
畑から、畝うつりに出て來る蛙を見ると、頭に三筋
ばかり長い髪の毛を引掛けて曳いて居るのです。お
や、また來るのも曳いて居る。五六疋――八九疋。
――此方の田からも飛込んで又引いて出る。す
ら／＼と長い髪の毛です。熟と視ると、水底に澄ま
した蛙は、黒いほどに、一束ねにして被いで居ます。
處々に、まだこんなに、蝌蚪がと思ふのは、皆、
ほぐれた女の髪で。・・・・・・

女神の堂に、あんなに、ばらみの、たぼみのが有
つたのを見ない前だと、これだけでも薄氣味が悪か
つたでせうのに。――そんな氣は些ともなかつ
た――たゞ、畝どなりの廢畑をよく見ると、疊
五枚ばかりの眞中に、燒棄の灰が、いつぱい濕つて、
淀んで、竹の燃えさしが半ば朽ちて、ばら／＼に倒
れたり、埋れたりして居ます。・・・・・・流灌
頂――蟲送り、蟲追、風邪の神のおくりあと、
どれも氣味のいゝものではない。いや、野墓、――

野三昧、火葬のあと……悚然とすると同時に、昨夕の白い踊子を思ひ出した。さながら此の蛙に似て居る。あつけに取られた時でした。

（やあー やあー やあー）

と山裾の方から、野良聲を掛けて、背後の畝を傳つて来た、鍬をさげた爺さんが、

（やあ、お前様いけましねえ。いけましねえ。）
慌てて挨拶した。

（何うも濟まない。）

（やあ、はい、詫びさつしやる事は何にもねえだがね、其處に久しく立つて居ると瘡を頻らふだあかな、取憑かれるでな。）

（え、何うしてだい。）

（何、お前様。）

と、榛の樹から出て来ながら、ひよい、とあとへ飛退つた。

（菜賣が其處で焼死んだてばよ。）

（焼死んだ。）

此方も退つた。

(菜賣? . . . ツて)

(おゝよ。一昨年づらい。菜賣の年増女さ、身體
あ役に立たなくなつたちで、其處な瓜番小屋へ夜番
に出したわ。――我が身で火をつけて、小屋ぐ
るみ押焦げたあだ。眞夜中での、――其時は、
はい、お月様も赤かつたよ。)

「.女神の殿堂の扉の下にやがて跪
いた私は、それから厨裡の方へ行かうとしました。

あの――山門を入つた正面の高縁の障子が開
いたまゝに成つて居ましたから、厨裡へもまはらな
いで、すぐに廊下を一つ、女神堂へ参つたのですが、
扉はしまつて居ました。

――此の開扉を頼むのと、もう一つ、急に住職
の志を得たい事が出来たのです。

唐花の繪天井から、壁、柱へ、綾と錦と、薄暗く
輝く裡に、他國では一寸知りますまい。以前、あの
あたりの寺子屋で、武家も、町家も、妙齡の娘たち
が、綺麗な縮緬の細工ものを、神前佛前へ奉獻する
習慣があつて、裁縫の練習なり、それに手習のよく

出来る祈願だつたと言ひます。四季の花は固よりで、人形の着もの、守袋、巾着もありませう、そんなものを一條の房につないで、柱、天井から掛けるので。祝つて、千成百成と言ひました。絢爛な薬玉を幾條も聯ねたやうです。城主たちの夫人、姫、奥女中などには金銀珠玉を鏤めたのも少くありません。

女神の前にも、幾條か聯つて掛つて居た。山の奥の幽なる中に、五色の蔦を見る思があります。こゝに、生りもの、栗、蜜柑、柿、柘榴などと、蕪、人参、花を添へた蔓の藤豆、小さな西瓜、紫の茄子。色がいゝから紅苺などと、二房一組。――色絲の手鞠さへ随分絲の亂れたのに、就中、蒼然と古色を帯びて、然も精巧目を驚かすのがあつて、――中に、可愛い娘の掌。ほどの甜瓜が、一顆。

嬉しくなつて、私が視入つた事は申すまでもありますまい。

黄に薄藍の蔭がさす、螺鈿の珠玉とか、柔く刻んで、ほんのりと暖。いやうに見えます、障子越に日が薄く射すんです。

立つて手を伸ばすと、届く。密と手で觸る
と・・・・・動く。・・・・・動く瓜の中に、
ふと、何かあるんです。」

「――中に――」
筆者は思はず問返した。

「中に何だかあるんです。チリン、チリンと眞綿
に包まつた、微妙な鈴のやうな音がしました。

あゝ、女神の簪の深祕に響くと云ふのは、此だ
と想つて、私は全身、くわツとほてりました。」
こゝに聞くものは悚然とした。

「中は空ろで、きれ仕立ですから、瓜の合せ目は
直ぐ分りました。が、これは封のあるも同然。神の
料のものなんです。参詣人が勝手には窺けません。

――眞先に此を一つと思つたんです。もう堂の
中に居るのでから、不躰に厨裡へ向つて、大な聲
は出せません。本堂には祖師の壇があります。こゝ
で呼立てるのも失禮だと思ひますから、入つた高縁

が踏反つて。

私は慇懃に禮をしました。

瞳を上げる、鼻筋が冷く通つて、片頬にはら／＼
とかゝる、軽いおくれ毛を撫でながら、静に扉を出
ました。水盤の前に、寂しく立つ。黒繻子と打合せ
らしい帯を緩くして、 しかし寝て居た
のではありません。迎へるやうに、此方から橋に進
んで――象嵌などを職にします――話して、
瓜の事を頼みました。

やさしい聲で、

(和尚様は留守でございます。けれど、明神様

へ 私から。)

(是非何うぞ。)

前刻は、あの柱の蔭に、と思つて、

(太神樂は如何でした。)

(まあ、違ひますよ、私は見はいたしません。)

(えゝ、それでは。)

(明神様の御像を、和尚さんが抱いて出たので

ございます。お慰みに、と云つて、私は出はいたしません。明神様も、御迷惑だつたでせう。)

(貴女は。)

(私は可厭ですわーそれに御厄介に成つて居ります居候なんですから。)

瓜の中が解つたら、或は此の意味も、何うした事か、解るかも知れない。

(これでございますね。)

御厨子の前に、深く蝋燭を点じ、捧げて後、女は紅の總に手を掛けた。燈をうけると、其の姿は濃くなつた。

(よく出来て居ますこと。)

(あゝ、然うして取れますか。)

自分の顔の蒼く成るまで、女のさしのばした雪白の腕に、やゝ差寄つて言ひました。

(畠のだと、貴方の方が取るのがお上手でせうけれど)

微笑する。

(えゝ。)

(これは、此の蔓の結びめで解けます。私なぞも、眞似をして拵へましたから存じて居ります。――

まあ、貴女が。)

と云つて、厨子を拝んで、

(お氣にめして、時々お持ち遊ばすさうで、些とも埃がついて居ません。――彼處へ……明るい處へ参りませう。お仕事の事で御覽になりますなら、其の方がよく見えます。)

消えるやうに成つて、すら／＼と出ました、障子際へ。明けると、荒れたが、庭づくりで、石の崩れた、古い大な池が、すぐ此の濡縁に近く、蓮は浮葉を敷き、杜若は葉がくれに咲いて居る。……御堂の外格子――あの、前刻階から差覗いた處は唯、黒髪の暗い籐だつたんですがな。

(何うぞ、貴女が明けて――お見せ下さい。)

さし向つた、その膝に近づきました。

(お菓子でせうか、よく合つて居りますこと。)

私へ、斜めに、瓜を重いやうに、しなやかに取つて、据ゑて、二つに分けると、魚が一尾、きらりと光り、テンノ、チンと鱗が鳴ると齊しく、ひらりと池の水へ落ちました。

あ、あ、あ、あの池の向うの、大なる松の幹を、結綿の娘と、折重つて、緋の單衣の少年が這つて居る。此方で、ひしと女に寄らうとする、私の膝が石のやうにしびれたと思ふと、對向で松の幹を、少年がずる／＼と、這つて落ちた。

落ちると同時に、その向うの縁に、旅の男が、圓鬚の麗人と向合つて居るのが見える。

其處には、瓜が二つに割れて、此處の松の空なる枝には、緋鹿子の輪が掛まりました。．．．．御堂も、池も、ぐる／＼と廻つたんです。

見る／＼野の末に黒雲がかゝると、黒髪の影の池の中で、一つ、かた／＼と鳴くに連れて、あたりの蛙の一齊に、聲を合はせるのが、

松の根本に苺が見える．．．．

あの當時の唄にそのまゝです。

飛びついて抱かうとする手が硬ばつて動かない。
化鳥の如く飛びかゝつた、緋の扱帯を空に掴んで、
自分の咽喉を締めようとするのを、ぢつと押へて留
めました。女の袖が肩を抱くと、さし寄せた頬にかゝ
つておくれ毛が、ゆれて、靡いて、其處等の、みの
毛ばら毛、髭も一所に、あたりは眞暗に成りました。

(連れてつて下さい、お優さん、冥途へでも何處
へでも。)

(お歸りなさい。――私が一所に参りますか
ら。)

其時、甘い露に……唇が濡れました。
息を返したんです。大笹の宿の亭主が、餘り歸りの
遅いのを見に来て、花桶の水を灌いだんださうです。

(……私が一所に参りますから。)
で、お優さんは、此の炬燵の、こゝに居ます。
筆者は炬燵から飛しさつた。

「しかし、此の頃に、大笹へ参つて、骨を拾つて歸らうと思ひます。」

あの時、農家の爺さんが（菜賣）の年増女だと、言つたでせう。瓜番の小屋へ自分で火をつけたのは尋常ごととは思はなかつたが。・・・・・たゞ菜賣とだけ存じました。――此の頃土地の人に聞くと、それは、夏場だけ、よそから来て、肉を賣る女の事だと言ひます。それだと、お優さんの、骨は、可心寺の無縁ですから。」

附記

其の後、大笹から音信があつた。――（知人は其の行を危んだが、小山夏吉は日を措かず能登へ立つた）――錦の影であらう、厨子にはじめて神像を見た時は、薄い桃色に映つた、實は胡粉ださうである、等身の女神像は肩に白い蓑を掛けて、其が羽衣に拝まれる。蓑を据ゑた大魚は、やや面が奇怪で、鯉だか、鱒だか、龜だか、蛇だか、人間の顔だか分らない。魚尾は波がしらに刎ねて居る。黒髪

の簪かんざしに、小さな黄金きんの鮒ふなが飾かざつてある。時に鏘々しやうくとして響ひびくのは此この音おとで、女神ぢよしんが梳くしけつると、又更またあらためて、人ひとに聞きいた。――それに、此この像ざうには、起居たちあがある。たとへば扉ふりの帳ちやうをとざす、其その時とき、誦經ずきやうしや者しやの手に従したがつて、像ざうの丈たけの隠かくるゝに連つれて、魚さかなの背せに膝ひざが着つくと言いふのである。が、小山夏吉こやまなつきちの目めにも、同じ場合おなばあひにその氣勢けはひを感じかんじた。波なみを枕まくらに、肱ひぢまくら枕ををさるゝであらう。蓑みのの白しろい袖そでが時ときとして、垂たれて錦帳きんぢやうをこぼれなどする。

不思議ふしぎな發條仕掛ばねじかけがあるのではないか、と言いふ。

實まことや、文化ぶんくわよりして、慶應けいおうの頃ころまで生存せいぞんした、加か賀大野港おほのみやとに一代いちだいの怪人くわいじん、工匠こうていざうにして科學者くわがくしやであつた。――町人ちやうにんだから姓せいはない、大野濱おほのはまの辨吉べんきちの作さくださうである。

三味線さみせん唯一たいつち挺たつを携たづへて何處いづこよりともなく濱はまつたひに流ながれて來きて、大野おほのの濱はまに留とどまつた。頻しきりに城下じやうかを往わう來らいしたが、醫いをよくし、巫術ふじゆつ、火術くわじゆつを知しり、其その頃ころにして、人ひとに寫真しやしんを示しめした。製圖せいづに巧たくみに、機軸きかくに精くは

しい。醬油のエッセンスにて火を灯し、草と砂糖を
調じて礦山のドンドロを合せたなどは、ほんの人
寄せの前藝に過ぎない。其の技工の妙を傳聞して、
當時の藩主の命じて刻ましめた、美しき小人の木彫
は、坐容立禮、進退を自由にした。餘りに其の活き
たるが如く、目に微笑をさへ含んで、澄まし返つた
小憎らしさに、藩主が扇子を以てボンと一つ頭を打
つや、颯と立つて、据腰に、矢庭に小刀に手を掛
けて、百萬石をのけ反らした。一寸辨吉の惡戯だ
と言ふのである。三聖酢をなむる圖を浮彫にした如
意がある。見ると、髯も、眉も浮出て居るが手を觸
ると、何にもない、木理滑かなること白膏の如し。
――其の理、測るべからず。密に西洋に往來す
ることを知つて、渠を憚るものは切支丹だとさゝや
いた。

――鳶（鶴ではない）を造つて乗つて、二階から飛んで其の行く處を知らない。

好んで、風人と交つたから、――可心は、此の怪工に知を得て、女神の像は成つたのである。

また希有なのは、此のあたり（大笹）では、蛙が、女神にさげ物の、みの、髭を授けると、小さな河童の形に成る。而して或ものは妖艶な少女に化ける。裸體に蓑をかけたのが、玉を編んで纏つたやうで、人の目には羅に似て透いて肉が甘い。脚は脛のあたりまで殆どあらはである。月朧に、燈くらき夜など、高濱、あべ屋、福浦のあたりまで、少からず男を惱すと云ふのである。

小山夏吉の手紙は、此の意味を――

「おもひの外、瓜吉（渾名をいふ）は暢氣だぜ。」

皆云つて居たが、小山夏吉は歸らない。

尚ほ手紙によると、再び可心寺に詣でた時は、和尚は、あれから直に亡くなつて、檀を開くの、村の人たちが立會つた。――無住だつた――と云ふから。

お優さんの骨　ー　ばかりでなく、靈に添つて、
奥の庵を畠に、瓜を造つて居るのだらう。本懐であ
らう。

蛙の唄をきゝながら、其の化けた不良性らしい彼
の女等を眷屬にして。．．．．．

あとでも、時々、瓜は市場に出た。が、今は他の
ものを装る器具でない。瓜は其のまゝ天來の瓜であ
る。従つて名實ともに鑿は冴えた、と其の道のもの
は云つた。が惜しいかな去年の冬、巖寒に身を疼ん
で、血を吐いて、雪に紅の瓜を刻んだ。

【完】